

# 中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因

## ——非対格自動詞の場合を中心に——

庵 功 雄

### 要 旨

中国語話者は漢語の知識があるために習得が容易な場合もあるが、日中両言語の間の「ズレ」のために習得が阻害される場合もある。本稿では漢語サ変動詞のうち、非対格自動詞の場合について、アンケート調査を用いて中国語話者による習得状況を見た。その結果、学習者の回答に「される」が相対的に高い割合で見られるものと「される」がほとんど見られないものが存在することがわかった。これは英語のL2習得で主張されている「非対格性の罍」の例の一つと考えられる。さらに、日本語能力がより高い中国語話者に対しても同じ調査を行い、その後フォローアップインタビューを行った。その結果、事態の成立に「外的な力」が感じられるか否かが「される」の使用動機となっていることが示唆された。

【キーワード】中国語話者、サ変動詞、非対格自動詞、非対格性の罍、外的な力

### 1. はじめに

中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語話者）は日本語学習者の過半数を占めるものであり、その教育は重要である。中国語話者は漢語の知識があるため、それが正の転移となって日本語の習得を促進することがある一方、日本語と中国語の「ズレ」のために漢語の知識が負の転移として働くこともある。本稿では、中国語話者による漢語サ変動詞の習得調査に見られた特徴をもとに、こうしたズレの一側面を明らかにする。具体的には、上級の中国語話者の作文に見られる次の(1)(2)のような誤用の理由について考察する。

(1)\*統計という言葉は、国の状態の意味であり、十七世紀に、ドイツで出現された。

(2)\*『新編日語』は、[中日] 両国の交流が繁盛期を迎える90年代に誕生された。

### 2. 先行研究

本稿で取り上げる問題は日中両言語における自他のズレという観点から中川（2005）などに記述があるが、言語習得という観点から考察したものは管見の限り、庵（2008）以外に見あたらない。庵（2008）は受身、使役を含むボイス全体を概観したものであるが、本稿で扱う、非対格自動詞の問題に関する踏み込んだ分析は見られない。

### 3. 調査の概要

本稿では次のような内容でアンケート調査を行った。

### 3-1 被験者

被験者の概要は次の通りである（表1）。

調査は、母語話者については名古屋大学と一橋大学で実施、実施時期は2008年12月であり、非母語話者については中国黒龍江大学で実施、実施時期は2008年11月である。なお、被調査者に1年生を含めなかったのは調査時点で受身と使役が未習だったためである。

表1 被験者の概要

母語話者	日本国内の大学(院)生26人		
非母語話者	初級 <sup>(1)</sup>	黒龍江大学2年生	48人
	中級	同	3年生49人
	上級1	同	4年生48人
	上級2	同	大学院生26人

### 3-2 調査文

調査文は日中で同形同義になる「動名詞」(cf. 小林2004)を用いて作成した。同形同義の判断は調査協力者の中国語母語話者(日本語教育専攻の博士課程の大学院生1名)の内省による。調査対象を同形同義のものに限ったのは、調査文の語彙が未習であるか否かを変数にしないための配慮である<sup>(2)</sup>。

調査文は全部で93文であり、そのうち、今回問題とする非対格自動詞と非能格自動詞に関するものは27文である。回答は次のような指示に答える形で行った((01)などは調査の際の問題文の番号である)。

#### 【調査時の指示文】

次の文の( )の中で適当なものに○をつけてください。2つ以上正解がある場合もありますので、正しいと思うもの全てに○をつけてください。

(\*下記の選択肢の「~される」は受身です。尊敬語を考えないでください)

(01) 彼は自動車事故で女性を(死亡しました 死亡されました 死亡させました)。

以下では紙幅の関係上、問題文を次の形式で表記する。つまり、この形式で( )に「し、され、させ」のいずれを入れるか(複数回答可)を選ぶという形に読み替える。

(01) 彼は自動車事故で女性を死亡( )ました。

なお、中国語においても、これらの語の自他の判断は語彙によっても異なり、話者による異なりも見られるようである。こうした問題を包括的に扱うのは本稿の範囲を大きく越えるが、5-3において少し詳しくこの問題を扱っている。

### 3-3 非対格自動詞と非能格自動詞

自動詞が統語的振舞いによって2種類に分かれるという非対格性の仮説は現在広く認められている(e.g. 影山1996)。この仮説によれば、自動詞は非対格自動詞(unaccusative intransitive verb)と非能格自動詞(unergative intransitive verb)に分かれるとされる。

非対格自動詞とは(G B理論に従えば)、D-構造で項が動詞の目的語の位置に生成し、S-構造でそれが主語の位置に移動する、次のような構造を持つものである。

(3) コップが割れた。

D-構造 [s e [vp 割れた コップ]] (eは空範疇)

S-構造 [s コップ<sub>i</sub>が [vp 割れた t<sub>i</sub>]] (tは移動の痕跡)

一方、非能格自動詞とは、D-構造で既に項が主語の位置に生成しているものである。

(4) 太郎が走った。

D-構造 [s 太郎 [vp 走った]]

S-構造 [s 太郎が [vp 走った]]

非対格自動詞と非能格自動詞の区別の仕方はいくつかあるが、本稿では意志形をとれる、命令形がとれる、という2点を基準とし、これらが可能なものを非能格自動詞、不可能なものを非対格自動詞と見なした<sup>(3)</sup>。

#### 4. 調査の結果

まず、非対格自動詞の場合の調査結果を掲げる<sup>(4)</sup>。なお、ここでは「させる」の回答は含めていない(数値は回答数)。

表2 非対格自動詞の場合

例文	初級(48人)		中級(49人)		上級1(48人)		上級2(26人)		母語(26人)					
	し	され	し	され	し	され	し	され	し	され				
(02) 事故の経過は彼の証言と一致( )しています。	41	5	46	3	42	4	25	3	26	0				
(27) 電車は時間通りに発車( )しました。	30	12	35	14	40	11	23	6	26	4				
(43) 外で歩かないと、足が退化( )ます。	39	6	35	9	41	6	23	3	26	1				
(45) パソコンの売り上げが停滞( )しています。	32	11	40	11	38	14	20	7	26	0				
(59) 彼は急に沈黙( )しました。	40	4	46	1	45	2	24	1	26	1				
(64) 彼は失業( )しました。	37	11	45	7	43	8	24	2	25	0				
(79) 地球の温度はこの10年で1度上昇( )しました。	35	10	42	5	42	5	23	3	24	0				
(82) この道路では5年間で事故が激増( )しました。	39	5	40	9	42	7	23	3	24	0				
(74) 首相の発言に失望( )しました。	23	16	△	30	12	37	7	20	5	25	1			
(14) ガンの治療法は日に日に進歩( )しています。	37	6	35	16	△	44	4	24	3	26	0			
(88) 戦争の危機が増大( )しました。	36	12	38	14	39	18	△	23	5	23	5			
(71) 自民党は政策をめぐる分業( )しました。	27	13	34	18	△	40	12	18	8	△	25	1		
(85) パーティは順調に進行( )しました。	26	13	32	24	△	37	14	16	9	△	22	6		
(29) この分野は急速に発展( )しました。	34	13	33	18	△	39	18	△	20	9	△	26	1	
(21) この機械の導入で仕事の量が減少( )しました。	19	18	△	24	24	△	39	19	△	16	12	△	26	5
(51) この10年間、日本では経済的格差が拡大( )しました。	24	22	△	31	23	△	35	20	△	12	15	△	24	7
(34) 彼女の踊りを見て、強く感動( )しました。	28	19	△	24	29	○	33	25	○	14	17	○	26	0
(11) 家の近くに長いトンネルが開通( )しました。	14	34	○	13	41	◎	19	36	○	9	19	○	25	6

◎: 80%以上が「され」を回答 ○: 50%以上80%未満が回答

△: 30%以上50%未満が回答 無印: 30%未満が回答 (記号の意味は表3~表6で共通)

表2から非対格自動詞の場合、母語話者は概ね「される」を回答しないのに対し、中国

話し手は「される」を回答している割合が相対的に高い場合があることがわかる（ただし、非対格自動詞全体にわたって「される」の回答が多いわけではない）。この点を明らかにするため、非能格自動詞の場合（表3）と対照してみよう<sup>65</sup>（数値は回答数）。

表3 非能格自動詞の場合

例文	初級(48人)		中級(49人)		上級1(48人)		上級2(26人)		母語(26人)					
	し	され	し	され	し	され	し	され	し	され				
(11)子どもたちが正門の前に集合( )ています。	33	2	31	12	46	9	22	7	25	1				
(15)軍隊はゆっくり前進( )ていました。	45	1	46	4	43	5	25	0	26	0				
(19)彼女は彼としっかり握手( )ました。	43	3	47	3	48	2	26	0	26	0				
(49)彼は10分で全ての問題に解答( )ました。	34	9	32	6	34	5	22	1	26	0				
(53)私は彼女の意見に賛成( )ます。	40	5	44	0	44	4	24	1	26	0				
(56)彼らは退職後オーストラリアに移民( )ました。	40	5	47	4	47	4	25	1	25	1				
(61)私は6時から2時間ほど外出( )ました。	45	3	46	2	45	6	23	2	24	0				
(58)彼女は親に反抗( )て、家出しました。	28	18	△	38	9	43	5	20	6	24	3			
(57)犯人は拳銃で武装( )ていました。	25	22	△	27	22	△	34	19	△	14	13	○	26	1

このように、非対格自動詞と非能格自動詞の間には差が見られる。ただし、非対格自動詞の中でも、「進行(85)、拡大(51)、開通(11)」のように「される」の回答が多いものと、「一致(02)、上昇(79)、沈黙(59)」のように「される」の回答が少ないものが見られる（母語話者はどちらの場合も概ね「される」を回答しない）。

## 5. 考察

本節では非対格自動詞に関する調査結果について考察する。

### 5-1 非対格性の罣

第二言語として英語を学習する学習者に、母語の違いにかかわらず、次のような誤用が見られることが報告されている（cf. Oshita 2000）。

(5) \*My mother was died when I was just a baby.

(6) \*He was arrived early. ((5)(6)はOshita (2000)より)

これらは非対格自動詞を受身にすることによる誤用である。Oshita (2000)はこのような誤用が起こる理由を次のように説明している。

(5)の“die”や(6)の“arrive”は非対格自動詞なので、(3)と同様に、D-構造からS-構造に写像される際に、内項がVの目的語の位置から主語の位置に移動する。ここで、(6)に対応する正用の文とその構造を表すと次のようになる。

(7) He arrived early.

(7)' [s He<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>V'</sub> arrived t<sub>i</sub>] early]]

ここで、受動文のS-構造を表すと次のようになる。

(8) Mary was kissed by John.

(8') [s Mary<sub>i</sub> [v<sub>p</sub> [v' was kissed t<sub>i</sub>] by John]]

(7') と (8') を比べると、両者で D-構造から S-構造への写像に NP 移動が関わっていることがわかる。両者の違いはその移動が形態的に有標な形でマークされるか否かにある。Oshita (2000 : 318) は Kellerman (1983) を引用し「非対格の「受身」の誤用を犯す学習者は英語を実際以上に体系的、明示的、論理的なものとして扱っていると見なせる」と述べている。

その上で Oshita (2000) はこれらの誤用が初級の学習者には少なく、ある程度学習が進んだ段階で現れ、さらに学習が進むと現れなくなるとし、これを学習過程において学習者が陥る非対格性の罠 (unaccusative trap) と呼んでいる。

非対格性の罠という考え方は日本語の非対格自動詞にも当てはまるように思われる<sup>6)</sup>。

## 5-2 超級学習者の内省

表 2 は中国国内で日本語を学習している学習者の回答をまとめたものであるが、同じ調査を一橋大学の大学院で日本語教育を専攻している大学院生 5 人 (全員中国語母語話者) に対しても行い (実施時期 : 2009 年 3 月)、その後フォローアップインタビューを行った。全員日本語レベルは超級と見なすことができる<sup>7)</sup>。その結果が表 4 である<sup>8)</sup>。表 4 から非対格自動詞の場合に「される」を選択するという誤用は超級レベルでも見られることがわかる。

ここで、フォローアップインタビューでわかったことについて述べる (以下の内容は 5 人の学習者が全員賛同したものである)。

まず、設問に答える際に中国語のことは意識しなかったと述べている。日本語で考えて回答したということである。その上で、例えば、(51) については次のような内省があった。

(51) この 10 年間、日本では経済的格差が拡大 ( ) しました。

この例では 5 人全員が「され」を選択しているが、その理由は「「経済的格差」は何らかの「外的な力」によって拡大するものなので、受身を使う」というものであった。これに対応して、(85) について被験者③は次のように述べている。

(85) パーティーは順調に進行 ( ) しました。

すなわち、この場合、「パーティーが「自然に」進んだ場合は「し」、そこに「外的な力」が感じられれば「され」を使う」ということである。

表 4 中国国内の学習者と日本語能力がより高い学習者

	中国国内の学習者(黒龍江大学) 数字は「され」を回答した人の%				母語 (26人) 数字 は%	日本語能力がより高い学習者(院生)超 級 年数は学習年数				
	初級 (48人)	中級 (49人)	上級 1 (48人)	上級 2 (26人)		①10.6年	②4年	③14年	④13.6年	⑤6年
(74) 首相の発言に失望 ( ) しました。	33△	25	15	19	4					
(14) がんの治療法は日に日に進歩 ( ) ています。	13	33△	8	12	0					さ
(88) 戦争の危機が増大 ( ) しました。	25	29	38△	19	19					
(71) 自民党は政策をめぐって分裂 ( ) しました。	27	37△	25	31△	4			し	さ	
(85) パーティーは順調に進行 ( ) しました。	27	49△	29	35△	23			し	さ	さ

(29) この分野は急速に発展( ) ました。	27	37△	38△	35△	4	しさ			さ	しさ
(21) この機械の導入で仕事の量 が減少( )ました。	38△	49△	40△	46△	19			しさ	しさ	しさ
(51) この10年間、日本では経済 的格差が拡大( )ました。	46△	47△	42△	58△	27	さ	さ	さ	さ	さ
(34) 彼女の踊りを見て、強く感 動( )ました。	40△	59○	52○	65○	0		しさ	しさ	しせ	しさ
(11) 家の近くに長いトンネルが 開通( )ました。	71○	84◎	75○	73○	23	さ		しさ	さ	しさ

\* 「さ」は「され」が、「しさ」は「し」「され」がともに回答された場合を表す

表4を見ると、超級学習者が「外的な力」の存在を感じるとする「拡大、進行、開通」では母語話者の回答率も相対的に高い。これらで「され」を許容する母語話者にとっては「され」の選択要因に「外的な力」が影響している可能性がある。しかし、今回の調査ではフォローアップインタビューを行っていないので、この点について、断定的なことを述べることはできない。今後の課題としたい。

### 5-3 中国語における自他

本稿で考察対象としている現象を本格的に考察するためには、中国語における動詞の自他の問題を考える必要がある。ただ、この問題は複雑で、その全体像を明らかにすることは本稿の範囲を大きく越える。ここでは、北京大学漢語言語学センターがオンラインで公開しているコーパス ([http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/index.jsp?dir=xiandai](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=xiandai)) を利用して、その一端を調べた結果を報告する。

調査の方法は次の通りである。調査対象は今回の黒龍江大学の調査でいずれかのレベルの「される」の回答が30%を越えた10語である。その10語に対応する日中同形語を検索語として上記のコーパスを検索し、ヒットした最初の50例（全く同じ文の場合はスキップする）についてその用法を調べた。その結果は次の通りである。

表5 中国語における自他

	中国国内の学習者(黒龍江大学) 数字は「され」を回答した人の%				母語 (26人) 数字 は%	中国語コーパスにおける分布				
	初級 (48人)	中級 (49人)	上級1 (48人)	上級2 (26人)		自動詞	他動詞	名詞	形容詞	副詞
(74) 首相の発言に失望( )ま した。	33△	25	15	19	4	17	0	12	16	5
(14) がんの治療法は日に日に進 歩( )ています。	13	33△	8	12	0	9	0	36	5	0
(88) 戦争の危機が増大( )ま した。	25	29	38△	19	19	31	8	4	7	0
(71) 自民党は政策をめぐって分 裂( )ました。	27	37△	25	31△	4	25	1	24	0	0
(85) パーティーは順調に進行 ( )ました。	27	49△	29	35△	23	6	44	0	0	0
(29) この分野は急速に発展( ) ました。	27	37△	38△	35△	4	32	4	14	0	0
(21) この機械の導入で仕事の量 が減少( )ました。	38△	49△	40△	46△	19	29	19	2	0	0
(51) この10年間、日本では経済 的格差が拡大( )ました。	46△	47△	42△	58△	27	11	20	19	0	0
(34) 彼女の踊りを見て、強く感 動( )ました。	40△	59○	52○	65○	0	35	10	5	0	0
(11) 家の近くに長いトンネルが 開通( )ました。	71○	84◎	75○	73○	23	15	31	4	0	0

このコーパス調査と今回の黒龍江大学の調査を比べると、確かに「拡大、進行、開通」については（他動詞用法の方が優勢であることから）これらにおける「される」の使用が（5-2で見たように、回答の際に中国語は意識しなかったという学習者の内省はあるものの）中国語の転移によるものである可能性は否定できない<sup>6)</sup>。しかし、「増大、分裂、発展」などでは自動詞用法が（圧倒的に）優勢であることから本稿で考察対象としている現象を全て中国語の転移と見なすことはできない。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、漢語サ変動詞のボイスのうち、非対格自動詞に関わる問題を取り上げた。その結果、日本語においても「非対格性の罨」に類する現象が観察された。また、日本語運用能力の高い学習者において、「外的な力」の存在の有無が非対格自動詞の受身化に関わっていることが示唆された。本稿の内容はこうした現象の存在を浮き彫りにした点で一定の意義があるものと考えられるが、課題もある。

最大の課題は調査法である。今回は複数回答を許す形にしたため、統計上の処理が不可能になった。今後は文法性判断テストなどの統計的処理が可能な調査法を用い、学習者の文法知識をより正確に捉えることを目指したい。

### 謝辞

本稿の例文作成、中国語についての知識提供に関して劉時珍氏にたいへんお世話になった。調査に際しては廬万才氏のご尽力を賜った。また、本稿の草稿に対して、定延利之、稲垣俊史、森篤嗣の各氏から丁寧なコメントをいただいた。いずれも記して心からの感謝の意を表する。

### 注

- (1) 今回の調査では学習者の日本語能力は調査していない。本稿の「初級、中級、上級」という名付けは日本語学習歴に基づく便宜的なものである。今回の被験者は全員日本語専攻の学生で、1学期に90時間の精読の授業を受けている。調査時に、2, 3, 4年生はそれぞれ2, 4, 6学期を終了していた。大学院生は理論的な本を読むため日本語自体の授業はとらない。
- (2) ここで言う「同義」は直観に照らしてほぼ同じ意味と見なせるものといった程度のものである。より厳密な意味論的手法によって精査すれば、同形語であっても日中間で微妙な異なりが見られる可能性もある。
- (3) 例えば、「\*退化しよう／\*退化しろ」「前進しよう／前進しろ」の文法性の違いから「退化する」は非対格自動詞、「前進する」は非能格自動詞と見なした。なお、この基準からすると、「沈黙」は非対格自動詞に含めない方がよいかもしれない。
- (4) 例文の配列順は次の通りである。(02)～(82)は中国語話者の回答に「される」が30%以上含まれるものがないものを問題番号の昇順に配列し、それ以降は「される」の回答がどれかのレベルで30%以上のものを「される」の回答が多いものが下に来るように配列した。
- (5) 「武装」の場合に「される」の回答が多い理由は明らかではないが、「武装」に再帰的意味があることに関係があるのかもしれない。

- (6) 日本語においても非対格性の罫による説明が成り立つことを示すには和語における「非対格自動詞の受身形」についても考察する必要があるとの指摘を受けた（張麟声氏，プラシャント・パルデシ氏。いずれも個人談話）。和語の調査については今後の課題としたい。
- (7) 被験者②は学習歴4年であるが，中国国内で日本語教育に従事している研究員である。
- (8) 表4は表2の中で「される」の回答がいずれかのレベルで30%を越えたもの（何らかの記号がついているもの）だけを抜粋したものである（表5も同様）。
- (9) 他動詞用法の場合に「外的な力」が働いていることは確かであるから，5-2で見た超級学習者の内省とこの結果は矛盾しない。

#### 参考文献

- (1) 庵功雄（2008）「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11，一橋大学，47-63
- (2) 影山太郎（1996）『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- (3) 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』くろしお出版
- (4) 中川正之（2005）『漢語からみえる世界と世間』岩波書店
- (5) Kellerman, E. (1983) "Now you see it, now you don't." In Gass, S.M. & Selinker, L. (eds.) *Language Transfer in Language Learning*. 112-134. Rowley, MA : Newbury House.
- (6) Oshita, H. (2000) "What is happened may not be what appears to be happening : a corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English." *Second Language Research* 16 : 4, 293-324.

(一橋大学)

---

### Some Factors Affecting the Acquisition of Sino-Japanese Verbs by Chinese Native Speakers: Focusing on Unaccusative Verbs

IORI Isao

Although Chinese-speaking learners of Japanese generally have an advantage in learning Japanese due to the existence of Sino-Japanese words, there are cases in which subtle differences between the two languages cause difficulty to Chinese learners. In this paper, I investigated the acquisition of Sino-Japanese verbs by Chinese speakers, focusing on unaccusative verbs, using a grammaticality judgment task. Results showed that there were two types of unaccusative verbs: ones for which sareru forms are accepted at a relatively high rate and ones for which sareru forms are rarely accepted. The former can be regarded as a case of the 'unaccusative trap'. I further collected data from more advanced Chinese learners and conducted follow-up interviews with them. Results indicate that the sareru form tends to be accepted when an 'external force' can be felt in the realization of the event.

(Hitotsubashi University)